カメラ探訪

ふるさとの心

その8　野坂の浦

八代海から見た日の出

ふるさとの通信

東京でおもうふるさと

山本義人

八年九ヶ月と二十五日、これは私が熊本を離れ現在に到るまでの日数である。

住み馴れた故郷の空は澄み、道端には花が咲きみだれ、私の心が苛立つ時も優しく慰めてくれた。また夢の中では、ふるさとはお伽の国の絵模様のように美しく浮かんでくる。

やっと昨年の四月に、私は故郷の土を踏むことができた。

長年思いつづけてきた故郷はあまりにも小さく感じられ、夢にまでも見た絵模様はどこかへ消えたようであった。道はコンクリートに冷たく包まれ、川幅は狭くなり、空は何だか低く感じられた。

「こんなはずじゃなかった」と戸惑うことばかりであったが、田舎に来て一日、二日と時がたつにつれ、だんだんと昔の面影が甦ってきて、もう少しで昔の田舎が完全に取り戻せるという時には、もう上京しなければならないのであった。

小さく感じられた故郷も、東京に帰って懐かしく偲べば大きく、美しく思われるのである。

東京で思うことはただ一つ、ふるさとはほかに二人といない恋人であるということである。この「故郷さん」という恋人を、これからも大切にしていきたい。

出身地　飽託郡天明町海路口三六七
勤務地　東京都東久留米市八幡町一―九―三九
㈱ヤクルト本社　東京工場勤務
出身校　昭和四十年三月　県立熊本農業高校　食品工業科卒